

---

## 不可侵区域・番外短編

初瀬こより

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不可侵区域・番外短編

### 【Nコード】

N9019V

### 【作者名】

初瀬こより

### 【あらすじ】

この番外短編は時系列としては不可侵区域完結後の話を主に、短いお話をいくつか載せていくつもりです。

## 桜、咲け。（前書き）

この番外編は不可侵区域・本編のネタバレがあります。お読みになられる際はぜひ不可侵区域本編を読み終えてからになさいますようお願い致します。

桜、咲け。

ドンドンと激しくドアを叩く音が千歳ちとせの部屋に鳴り響いたのはとある早春の夜のことだった。

「お。結恵ゆえ、来たのか。随分早かったなー」

これから行くから！ とメールを受信したのはほんの三分前なのだが。

「走ってきたのか？ 何だろなー？」

ピザマンを食べている鷹槻たかつきを振り返りながら、千歳は首を傾げた。「どーぞー」

とりあえず千歳が声をかけると、部屋の扉が勢いよく開け放たれる。もう夜も遅いと言うのに元気なことだ。

「お邪魔します！ 見て見て！ 制服できたっ！」

部屋に入ってきた結恵は、上機嫌で千歳と鷹槻の前に立った。

濃紺のブレザーに校章入りのエンブレムと金ボタン。青と緑系のチェックのリボンタイと、それと揃いのチェックのスカート。紺のハイソックスにも校章が刺繍されている。

これが結恵と鷹槻が四月から入学する高校の制服だ。

「おーもう出来たのか。似合う似合う」

「へへへありがと」

結恵は頬を弛ませて千歳と鷹槻の向かいのソファに座った。

「実は昔から憧れてたのよねーこの学校。基本的に初等部までで大方の人間が入っちゃうから、中等部・高等部はごくごく少数しか取らない日本きつての金持ち学校にしてエリート養成校！」

「何か知らないけど嬉しそうで何よりだなー」

「そりゃあ嬉しいわよ！」

結恵は身を乗り出して拳を握り締めた。

「学費・偏差値・設備の充実度は国内随一と名高い名門校だもの！ 国の重要文化財だというお城のような本館校舎に、一流企業によ

うな校舎の数々。プラネタリウムに音楽堂に温水プールにスポーツジム、蔵書百万冊を超えるという図書館、最新機器の揃ったIT室購買はまるでショッピングモール、学食・カフェテリアは和・洋・中で味は高級料亭並み！」

熱く語る結恵を、千歳と鷹槻はのんびりとお茶を飲みながら眺めていた。

「その上この制服だつて靴下、皮靴まで一流ブランド一式！ 値段を聞くのも恐ろしいわ！ この年でこんな贅沢味わっちゃっていいの！ かって正直腰が引けるのよ！ けどやっぱり嬉しいの！ 何と言っても長年憧れていた学校の一員になれたって気がするじゃない！？」

それでも結恵の興奮は冷めることはなく、まだまだ熱く語っている。

「……結恵はこんなに熱く語るキャラだったのかー」

「……俺も頼まれて学校案内した時に驚いた。目が違つんだよ、煌めいてるんだよ、ものすごく。本当に不登校児か？ こいつ。学校嫌いなんだと思つてた」

「結恵をそんなに煌めかせるくらいの学校かあ。俺も行きたいなー」

「何言つてんだよ、クソジジイ。頼むからそれを本気で実行するなよ？」

鷹槻は呆れ混じりに言つて、空になつた湯呑みに新たに茶を注いだ。

「クソジジイつてその呼び方がいい加減に直せつてーの。年長者は敬えつて言つて何度も言つてるつてのに。あー何かムカついたから本気で学校通おうかなー。しかもせっかくだから、うちの大事な大事な結恵と同じクラスにしてもらおうかなー。変な虫がつかないか心配だしなー」

「はっ！？」

鷹槻は湯呑みを叩きつけるようにテーブルに置いて、千歳を見た。そんな様子を見て、千歳は笑いを押し殺していたが、鷹槻はそん

なことに一切気付いた様子がない。

（こつちもかわいい奴だよなあ）

いじり甲斐が出てきたと言つか。この点では特に結恵に感謝をしなければなるまい。

「え、何？ 千歳も学校通いたいの！？」

ようやくこちらの世界へ戻ってきたのか、結恵は我に返ったように驚きの目で千歳を見た。

「おい結恵。このジジイの言うことをいちいち真に受けるな……」

「うん。せっかくだから通ってみたくなった。ちょっと桂子に頼んで、他の奴ら脅してみようかなーって気になってる」

「千歳っ！ お前もあんまり冗談が過ぎると……」

「いいじゃん！ 千歳も同じ学校だったら楽しいよ！ ね、鷹槻」

結恵は常なら考え難いほどのテンションと笑顔で鷹槻を見た。

きつと今のすっかり舞い上がった彼女には何を言っても無駄だろうと、鷹槻はここで悟る。

「男子の制服は同じ色のネクタイだったよ。きつと似合うし、鷹槻

！ 鷹槻の制服、千歳に貸してあげてよ」

「……絶対嫌だ」

不機嫌なオーラをまき散らして鷹槻は呟く。

「えー何だよ」

「第一千歳には俺の制服じゃデカイだろ？」

「少しくらい平気でしょ？ ねえ？」

「そうそう」

千歳は鷹槻の不機嫌の要因を理解した上で結恵に同意する。

クソジジイ！ と胸の内で毒づきながら鷹槻は千歳を睨むが、当の千歳はどこ吹く風だ。

それほど表情豊かでない鷹槻がこれ以上ないほど不機嫌な顔をしたところでさすがに千歳も遊びすぎたか、と軽く反省してみたて話題を変えることにした。

「まあそんな冗談半分はさておきだ」

「冗談なのっ!？」

結恵ががっかりしたように声を上げた。

「うん。興味本位で行ってみたいなーくらい」

千歳はこくりと頷いて結恵と鷹槻に笑いかけた。

「もう半月後にはお前たち高校生かー。本当だったら入学式に行つてカメラとかDVDとかでお前たちの晴れの日をぜひと永久保存したいんだけど、そもいかないから、せめて写真を撮って俺のところに持参しろよ?」

「写真なんか欲しいもの?」

結恵は不思議そうに千歳を見た。

「欲しいさ。可愛い子供達の晴れ姿だからな。と言うわけで鷹槻。お前もしかめっ面じゃなく、ちゃんと笑顔で写ってこいよ?」

「……めんどくせ」

鷹槻は軽く顔を背けて言う。けどその表情からは、先程の不機嫌が若干抜けていた。

「入学式には桜なんだってな? 今年は桜の開花が早いらしいからお前たちの入学式まで咲いてるといいんだけどな」

「そうだね。校門前の桜並木すごかつたし、どうせなら桜満開の入学式がいいなあ」

それから結恵は思い出したように鷹槻を見た。

「そう言えば鷹槻」

「何だ?」

「入試の時に見かけたんだけど、中庭に大きな桜の木が一本植わってるじゃない? あれって中庭のシンボルみたくなってるって聞いたんだけど、何か特別な由来でもあるの?」

「中庭……」

鷹槻は全く興味がなかったそれに関する記憶を手繰りよせ、しばらく考えていたかと思うとゆつくりと顔を上げた。

「ああ、思い出した。あの木は緑の桜が咲くんだよ。うちの学校の創設者がその桜が好きで植えたらしいとかって」

「え、緑の桜なんてあるの!？」

「正確には鬱金桜うこんざくらって言つて、ごく薄い黄色なんだけど、周りの葉の影響とかで薄緑っぽい色の花に見えるんだよ。そう希少な品種つてわけではないらしいけどな」

「へえ。桜って言ったらピンクしかないんだと思つてたよ」

「俺も。入学式の時、そこでも写真撮つてこいよ。俺も見たい」

「確かあの桜はソメイヨシノよりも開花時期が少し遅いから無理だと思ふぞ?」

「えー残念」

結恵はあからさまに残念そうに肩を落とした。

「まあ入学式じゃなくてもいいじゃんか。咲いたらその時にまた写真撮ればいいんだからな」

千歳がなぐさめるように結恵に言う。

「何でそんな花見客みたいな真似するんだよ? 恥ずかしいだろ」

「何だよー年寄りを喜ばせるよ」

「……ジジイ呼ばわりしたこと、根に持つてるのか?」

「まさか」

千歳はにっこり笑つて結恵と鷹槻の頭をそれぞれの手で撫でた。

「楽しみにしてるからな。お前たちの晴れ姿。永久保存して墓に持つてく」

結恵はくすぐつたそうに笑つて頷く。

「携帯に写メ送つてあげる」

「あ、それいいな。携帯の待ち受けにできる」

「やめろよ、どこの親バカつてか爺バカだよ?」

「我が子がかわいくて仕方ないのは親の務めだ」

自信たっぷりと言う千歳に、鷹槻は頭を撫でられたまま小さく呟く。

「爺バカ」

「何とでも言え」

楽しげに千歳は笑い声を洩らして言った。



「二人とも、三年間たくさん思い出を作れよ。その時はム力ついたりしんどかったりしても、大人になった時には恥ずかしくて穴掘りたくなったり、笑い合ったりできるようなのをたくさん」

千歳の手の下で、結恵と鷹槻は顔を見合せて小さく笑った。

「うん」

「やっぱり千歳は爺バカだよな」

「爺にバカに本当言い放題だなーお前は」

千歳は二人の頭を撫でていた両手で鷹槻の両頬を遠慮なく引つ張り、結恵はその光景を見て声を上げて笑い、鷹槻は全力で抵抗して桜の季節はもうすぐそこ。

了

## 酒とお茶と子供（前書き）

この短編は本編よりかなり過去、昭和初期が舞台となっています。

## 酒とお茶と子供

綾峰千歳がその異変に気付いたのはある晩、自室に運んでこられた食事に口をつけ始めてからだった。

「あのさ」

「はい」

千歳は凍りついた表情で、食事を運んできた彼付きの女中にソレを向けた。

「これ、水じゃね？」

そう言った彼の手に持たれたのは、江戸切子の杯。さかすき

千歳の食事は彼の希望で夕餉に酒がつく。ところが今日彼が口にしたそれは、どう味わおうと水でしかない。

すると年嵩の女中は居住まいを正し、はつきりとした口調で言った。

「千歳様。満二十歳に満たぬ者は酒類を口にすることを禁ずる法が大正十一年に制定されたことは御存じで御座いますね？」

「……それは知ってるけどさ、十年以上も前に決まったやつだろ？」

「千歳様」

彼の世話役でもある女中は肅々と続けた。

「貴方様は生きた時は確かに四百年を優に超えておられますが、そのお体は十七の時分のもの」

「うん。そうだな」

「何でも酒類は未成年者が口にすれば体の発育を遅らせるなど、よろしからぬ影響が出るもののだそうです」

「……そうなんだ」

「故に旦那様より申しつけられました。お体は満二十歳に満たぬ千歳様に万が一のことなどがありませんよう、今後御酒はお口にさせぬようにと」

それはまさに青天の霹靂だった。

千歳の手から杯は転げ落ち、異国製の絨毯の上を転がって行つた。  
「なつ、そんな今まで俺、普通に飲んできたんだぞ!? 四百年も  
飲んできたけど別に今まで何もなかったじゃないか! て言うか、  
何で十年も前に出来た法律を今さら蒸し返すんだ!？」

酒が一日の終わりの楽しみ、というやや寂しくも取れる嗜好をも  
つていた千歳は半泣きになつて訴えた。

だが、屋敷でも一、二を争うほどには優秀な女中は顔色ひとつ変  
えない。

「今後もないとは保障出来かねます。飲酒により千歳様の御力、御  
体に何かあつてからは遅いのです」

「そ、それこそ俺が先見をすれば……」

「たとえ先見で何か障りのある結果が出たとしても、貴方様は仰ら  
ないでしょう?」

厳しい女中の視線に千歳は黙つて目を逸らした。

凶星だ。

伊達に彼女も彼に二十年も仕えているわけではない。

「千歳様。どうぞ御自分の御立場、周囲の方々への気配り、お忘れ  
下さいませぬよう」

そう言つて彼女が深く深く頭を下げる中、千歳は杯を持ったまま  
の体勢でただただ固まっていた。

昭和十年、とある晩のことだった。

「理不尽だ。あんまりだ」

あの夜のやるせなさと言つたら十日経つた今も忘れやしない。い  
くら待遇だけは国賓級だと言え、軟禁とも言える生活を送る身から  
貴重な楽しみであつた酒まで奪うとは。

千歳が本日何度めかもしれぬ溜め息を吐いた時だった。

「うわ。まだ拗ねていたのか」

揶揄混じりの声を挨拶にやってきた客人に、千歳は顔を上げた。

正式な扉ではなく、一見壁にしか見えない隠し扉から入ってきた小さな客人は千歳の前までやってくると、手にしていた包みを彼に差し出した。

「酒ではないが手土産だ。これなら父様たちも文句を言うまい」

そう言つて笑う姿はまだ十歳にも満たない幼子のもとは思えない尊大さに満ちていた。

それも当然であり、むしろそうでなくてはならないとその子供の周囲は思っている。

そしてその彼、綾峰本家嫡男は周囲のそういった期待を裏切るところか更に上にいつて応える。とは言え、彼のそれは年長者である自分に対してどうなのかと最近考えさせられるが。

「……義将<sup>よしまさ</sup>。お前はまた勝手に入ってきて」

「誰にも見られていないから問題ないだろう。そして誰にも悟られることなく階上へ戻れば何一つ問題ない」

義将は余裕に溢れた笑みを浮かべ、千歳に渡した包みを開きはじめた。

「千歳は茶は飽いたと言っていたな」

「二百年前から百年ばかり凝っていたからな。さすがに飽きが来たんだ」

そしてその次に凝つたのが各地の地酒だった。

更に異国から様々な酒が日本に入ってくるようになり、本来商家である綾峰家は様々な新しい珍しい酒を入手するようになった。それが一部特権階級の間で出回るようになり、一族が地酒に凝っていた千歳に献上した。

以来長く千歳の関心は酒にあつたのだが、何も法が定められてから十年以上も経ってから未成年者対象のそれに触れるなどと言われ、貴重な趣味を奪われるとは思ひもなかったが。

「俺は酒には酔いにくいけど、土地ごとに味わいが違って面白いんだ。異国の物ともなれば尚一層。俺の知らない土地と文化と人々に育まれた酒だなんて、味わい深いだろ？」

「何と言おうが、酒に執着して子供より幼い反抗の仕方をする大人は見栄えがしないぞ」

義将は可愛げもなく言い捨て、部屋の隅にある釜戸で湯を沸かし始めた。

「……何してるんだ？ 綾峰本家嫡男ともあるう者がそんな女中のようなことをするなどーって怒られるぞ？」

「今この場のことは千歳が黙っていれば、僕が怒られることはない」  
…… 本当にしたたかに育ったものだ。

この年でこれならば、彼はこの世知辛い世の中でも立派に生きていくことだろう。

まあそれはそれでいいことが、などと千歳が考えているとふいに義将が口を開いた。

「酒は」

義将は千歳に背を向け、慣れない手つきで作業を続けながら小さな声で続けた。

「酒は嫌なことも忘れられると聞いた。阿片あへんもそうらしいが、阿片ほどの中毒性はないそうだな。……だから千歳は酒を飲むのか？」

幼い彼が今どんな顔をしているのか。

背を向けられたままでもそれが嫌と言う程に伝わってきて、千歳は黙って彼の小さな背を見つめた。

誰より尊大で口達者であろうとも、義将はまだ子供なので声は言葉より素直に彼の心情を語った。

「千歳は父様や医者よりも前から知っていたのか？ お祖母様が亡くなることを」

「……」

三ヶ月前、綾峰前当主の妻である義将の祖母が他界した。

穏やかな性質の彼女は三ノ峰家からの本家へ嫁入りしてきた。つまり千歳にとっては直接の遠い子孫にあたる。

そして千歳の大事な『子』であると同時に、義将にとっても唯一無二の祖母だった。

義将は生まれた瞬間から乳母によって育てられ、周囲を教育係に囲まれて厳しく育てられた。両親は彼に期待を寄せると同時、立派な跡取りとして彼を早くから大人と同じ扱いをしてきたため、義将は甘えることの出来る両親というものがいなかった。乳母や教育係達、それに既に他界した祖父にしても同様だった。

そのような中、唯一義将を子供として甘えさせてやったのが義将の祖母だった。

周囲は将来の綾峰の当主である義将のためにならないと度々苦言を呈していたが、千歳はそれでいいと思っていた。

子供のうちくらい、うんと甘えさせてやっていいはずだ。叱ってくれる役目の人間は大勢いるのだから、それとバランスをとれるくらいは温かさをくれてやって丁度いいだろう。

だがその彼女はもういない。

年を経て病がちだった彼女の遠くない終わりを最初に見たのは他でもない、千歳だった。その後、医師の診断で正式に一族に通達された。

だが、義将には知らされなかった。

まだ子供の跡取りには衝撃が大きいだろう。そう言って。

こんな時ばかり子供扱いだ。

そう思いつつも自分も同じ事を思い、義将に何も伝えなかったが……。

泣き顔など見たいものではない。

子供には笑っていてほしい。

少しでも幸せでいてほしい。

それは大人の勝手な押し付けでしかないのだろうが、そう思う。そう、願う。

「……祖父の時は、これほど強い喪失感はなかったんだ」

ぽつりと義将は零した。

「正直、祖父は雲の上の人。綾峰の絶対の主。そういう印象があったから……親しみ、は感じられなかった」

沸騰した湯を陶器のポットに注ぎながら、義将は言う。

「けどお祖母様は違った。父様や母様や、他の使用人たちよりずっと近い所において、僕の事を見てくれると思っていたから……だから」語尾が微かに震え、義将は一度黙った。

ポットや銀のスプーンが音を立て、沈黙を埋める。

「……っお祖母様が亡くなられて僕自身にも大きく穴が開いたみたいで、もう三月も経つのに、僕はまだこの穴から逃れられない。会いに行くこともできないのにお祖母様の部屋の前へ行ってしまう。会いたいと思ってしまう。……いないのに。お祖母様はもう、この世界のどこにもいないのに、そう思ってしまうんだ」

ぽたぽたと音を立てて、涙が零れ落ちていく。

「こんなに苦しくて苦しくて仕方ないなら、お祖母様のことを忘れてしまいたいとすら思う。僕はまだ酒は飲めないし、阿片を使う気もない。だけど……苦しすぎる。悲しくて、寂しくて、どうにかなくなってしまうそうだ……っ！」

小さく背を丸くした義将の肩に、千歳は手を乗せた。

その薄い肩は小刻みに震えており、俯いた表情は窺えない。

「義将。お前、ちゃんと泣いたか？」

千歳の問いに義将はかぶりを振った。

「綾峰本家の跡取りが泣くなどするな。そう言われている」

それはきつと普通の子供のように些細なことで泣くな、という意味だったのだろう。実の祖母の死にまで涙するなという意味ではなかったはずだ。だけど義将はその言葉を素直に受け取り、小さな体でそれを必死に実行しようとしている。

「義将。大事な人間がいなくなつて悲しいのも寂しいのも当たり前前のことだ。だから、泣いていいんだ」

千歳はしゃがみ込み、義将に目線を合わせた。

義将は口を真一文字に結び、顔を真っ赤にして泣くことを辛うじて堪えているといった風だった。

「辛いのなら泣いて泣いて、気が済むまで泣くといい。俺はそうし



てきた。人のいない所でも、誰かいる所でもいい。気兼ねなく泣けるところで泣け。枯れるほど泣いたら、そうしたらまた立ち上げればいいんだ」

義将の大きな目が、薄らと水に滲む。

小さく身を震わせ、強く瞼を閉じ、顔をしかめた。

「……千歳はそうやって、たくさん人を見送ってきたのか？ お祖母様やお祖父様や、そのもつと前の人達も、ずっと」

「ああ」

「……どう、やって？」

今にも崩れてしまいそうな声が震えながら訊いてきた。

「泣いてもお祖母様は帰って来ない。もう会えない。なのにどうやって、立ち上げればいいんだ……」

「会えなくても、その人が自分と『いた』っていう事実はなくならない。お前達が過ごした時間は、お前が忘れなければ永遠に失われない。今はまだ辛くても、いずれその記憶がお前の支えになる時がくるよ」

義将の閉じた両目から堪え切れなくなった涙が溢れだす。

千歳は彼を抱きよせ、背を撫でた。

「辛さを御そうとするな。無理に忘れようとするな。辛いのはその人が大切だったから。忘れない程苦しいのは、その人との記憶が尊いものだから。それだけ愛しい人と出会えたことは、誇るべきことだ」

千歳の腕の中で、義将は赤子の頃より激しくしゃくり上げた。

「……お祖母……様っ。お祖母様っ……」

声を上げて泣き始めた義将の背を、千歳はずっと撫でていた。

泣く義将にかつて妻を亡くした日の自分を重ね、そこから続く見送ってきた人々に思いを馳せながら。

目を真っ赤に腫らした義将は千歳の部屋にあったカップに、先程

のポットから濃い褐色の液体を注いだ。

「……これは、珈琲？」

千歳はカップに鼻を近づけながら首をひねった。

珈琲はかつて流行り出した時分に飲んだことがあるが、カップの中のそれは珈琲の香ばしい香りとも違う。何と言つか、珈琲とはまた違った苦い匂いがする。

すると義将は両手を組んで、威風堂々とした態度で言い放った。

「これは紅茶だ」

「紅茶あ？」

千歳は思わずその液体を凝視した。

紅茶も以前、何かの折に口にしたことはある。だがその頃の千歳の関心は酒にあり、さして印象には残っていなかった。

だが少なくとも紅茶と言うだけあって、赤みがかった褐色の澄んだ液体だったことだけは覚えている。

「いや……珈琲だろ。この色」

「紅茶だって言ってるだろう。ほら、これを見る！」

そう言って義将が差し出したのは『tea』と書かれた外国製の缶。

外国語の知識はほとんどないが、確かにteaはお茶を現したはずだ。

「先日、伯母様が英国に旅行された際にお土産にたくさん買ってもらったんだ。その一部を厨房から持ち出してきた」

「こちら。厨房に勝手に入ったなんて知られたら怒られるぞ？」

仕えられる立場の人間は、仕える人間の領域に立ち入ることは好まない。まして跡取りとして過剰なほどの期待をかけられている義将なら尚更だ。

だが義将は不遜なまでの調子で言った。

「言っているだろう。気づかれなければ全てはなかったことになる。それだけだ」

「……お前は立派な跡取りになりそうだなー」

苦笑して千歳は彼が慣れない手つきで淹れてくれた紅茶を覗き込んだ。

黒に近い暗褐色。

この匂いからして絶対苦い。だがせっかく義将が淹れてくれた茶。そこまで考えて、ふいに千歳の中に疑問が浮かんた。

「そう言えば義将。何でお前、急に淹れたこともない茶なんて淹れようとしたんだ？ 跡取り様は他人に淹れさせるものだろ？」

すると義将は不機嫌に目を眇めた。

「一族がお前に酒禁止令を出して以来、食事をまともに取らずに拗ねていると騒いでいた。だから酒の代わりにならないかと持って来てやったんだ」

つまりこれは彼の氣遣いだったというわけか。

生まれてこの方、この先だって労働になど従事する事もないであろう彼が。

まだ自分も祖母の死から立ち直りきれていないと言うのに。

「今日のは少しばかり抽出時間が長くなってしまったから味は濃すぎるかもしれないが、先日飲んだ紅茶はとても美味かった。きつと千歳も気に入ると思うんだ」

義将も無関心を装いながら、千歳と向かい合ってカップを手に取った。だがその水色の濃さを見て、一瞬怯む。

「……いや、やはり淹れ直す。少し待っている」

「あーいい、いい。せっかくだ。このまま頂く」

立ち上がりかけた義将を制して、千歳はカップを口元に運んだ。そしてそのまま既に冷めかけている紅茶に口をつけた。

これは……苦い。予想以上に。

不覚にも涙目になってしまった。

義将が慌てたように千歳のカップに手を伸ばす。

「お、おい。無理して飲むな。淹れ直すから！」

「いや……飲む」

カップを取り上げようとした義将の手を振り払い、まだ三分の二

ほど残った紅茶を一気に飲み干した。そしてソーサーの上に音を立ててカップを置いた。

「……美味かった!」

顔を上げた千歳の両目には涙が滲んでいる。

つい口を開けてその様子を見ていた義将は、おもむろに持ってきた手荷物の中から小さな壺つぼを取り出した。

「砂糖、あったのに」

「!」

「あとは湯を入れるなりすれば、もう少し飲みやすかったと思う」  
次々と述べられる義将の言葉に、千歳はその場に頂垂れていった。

「あー……まあいいよ。美味かったよ。うん」

どう見ても美味しかったという者の顔色ではないだろうと思う義将の頭に、千歳の手が置かれた。

「ありがとな」

義将が顔を上げると千歳は笑っていた。

照れ隠しのように俯きながら義将は早口に言った。

「……紅茶はちゃんと淹れると美味い。千歳の次の趣味になりそう  
だと思ったんだ」

「うん。そうだな。色々研究してみるか」。茶も奥深いよな」

楽しげに言っつて、千歳は義将の持ってきた紅茶の缶を手を持った。

了

## 酒とお茶と子供（後書き）

本編主人公・結恵の祖父、義将さんの子供のお話でした。本編中で名前はけっこう出てきたけれど既に故人だったため登場の機会がなかったのでもちろで書かせていただきました。個人的にお酒を飲めず落ち込む千歳を書いていて楽しかったです。

ひとり、それから。

綾峰本家を筆頭に、最も古いとされる分家が四家。

更にその分家の分家。更にその家に仕える人間……。

綾峰家敷地内には二世帯住宅なんて域をとうの昔に越した、決して少なくはない人数・世帯が古くから暮らしている。

「だからあんまり顔を合わせる機会がない奴も当然いるし？ そんな奴のお客とかだったらますますわかんねーし？ 知らない顔を見たって別にあんま気になんねえんだけど」

枯れたサヤインゲンと称された髪を中三になって金一色に染め直した令は、綾峰本家屋敷図書室の椅子にだるく座り、たそがれ時の窓の外を見ていた。

「けどそれは昼間とか、あとはせいぜい夕方くらいまでの話なわけよ。それくらいの時間帯なら客がいたっておかしくねえじゃん？」

令の視線が向けられ、同じ机を囲んでいた結恵と鷹槻、律、四葉と顔を見合せながらそれぞれ曖昧に頷いた。

令はその反応に満足したように頷き、更に続けた。

「泊まりの客だってそりゃいるぜ？ たまにだけど。けどこの敷地内ってのは閉鎖的なだけに、他人に関してはキビシイんだ。だからそいつ一人が敷地内を自由に歩けるなんてことはまずない！」

令は声を張り上げ、両手を机について立ち上がった。

「……そう、なんだ」

「そうなんだよ！」

結恵の微妙な相槌にも令は気にせず熱く答える。

そして両手で頭を抱えながら、その顔を青白く染めていく。

「だからおかしい！ 俺が見た、『あれ』は一体誰だったんだ！？」

「見間違え」

「どっかの誰か」

「怪奇現象」

律、四葉、鷹槻が順に言っていくが、最後の鷹槻の言葉によって令は青白い顔を真っ青にしてその場に突っ伏した。

「やめろーっ！！ 考えないようにしてるのにつー！！」

「情けねえなあ、オイ」

半狂乱に叫ぶ令を横目に、その双子の兄である律は呆れ混じりに呟いた。

「午前四時じゃ丑三つ時じゃないし、オバケの類にしてもあれだよ  
ね」

四葉はうんうんと頷く。

「オバケとか具体名を言っないっ！」

令の目には軽く涙。

最初に相談がある、と持ちかけられた時から彼の顔色は優れなかった。そして実際に話し始めればその顔色は更に急降下。

「あんた前に綾峰半魚伝説を律と語ってくれた時は揚々と話してたくせに、何だって今回はそんな及び腰なの？」

結恵が素朴な疑問をぶつけると、令は今にも泣き出しそうな顔を歪めて訴えた。

「だって実際に見るのと話に聞いたくらいじゃレベル違うじゃんか！ 俺に実害が及ぶか否かで対応だって変わってくるさ！」

「とんだジコチューだね」

四葉があっさりとした口調で片づける。

「ただのチキンだよ。情けねえ奴。おまけに朝っぱらから「何か出た！」とか言っって人を起こしに来るし」

律は欠伸をしながら恨めしげに令を見た。

「……起こしてもなかなか起きてくれなかったじゃんか」

情けなく項垂れる令を見ながら、結恵は話を区切るように言った。  
「……えーっとつまり話をまとめよう？ 令は今朝午前四時頃。目が覚めてしまって自宅屋上に出た。そしてその屋上から見える敷地内の小道を見知らぬ人物が歩いているのを見た。けどその人物は本当に誰だかさっぱり心当たりがない。それでいい？」

結恵がまとめると、令は激しく首を縦に振った。

「あんな時間にひとりでこの敷地内を歩いてるって何だよ？ しかもさ、奥に奥に……本家のほうに向かって歩いていったんだよ。そのまま戻ってくるのを待ってたけどそいつは戻って来なかったし、敷地の入口の警備員に聞いてみたけどこの一週間は客なんてどこの家にも一人もいないっつーし……」

そう話す令の語尾はがたがたに震えている。

「あ、あれは一体何者なんだろうーね……？」

すぐるような視線を向けてくる令から目を逸らし、結恵は鷹槻を見た。

鷹槻は滅多に変わらない顔に渋面を浮かべ、軽く頷いた。

（……千歳、しかないよね）

この綾峰家の生き神。

五百年の時を生きる、綾峰家の遠い祖先。

彼は今もこの敷地内にいる。十七歳の姿のまま本家屋敷に捕らわれている。

もっともその事実を知るのは綾峰の中でもごく一握り。この中では結恵と鷹槻だけだ。

「ねえ。参考までに聞きたいんだけど、その人の姿形はどんなだった？」

聞くまでもなく彼なのだとは思うが。

「どんなって……多分男だと思う。若い、俺らと同じくらいの。遠目だったけど」

「服装は？」

「えーと……ダメージデニムにパーカーっぽい格好だった気がする」（そんな服、持ってたよなあ）

生き神様と言われる彼は、その呼び名のイメージとは随分かけ離れた生活を送っている。

ネット通販を楽しんだり、服も今時の若者となんら変わらない格好。生き神だとか五百年生きる不老の人物だとか綾峰の呪いだとか



様々に言われる彼だが、その実はかなり面白い人物だ。

「……令」

沈黙を守っていた鷹槻の呼びかけに令が顔を上げた。

「何だ？」

「見間違いだ」

鷹槻は珍しくはつきりとした口調で言い切り、当の令は困惑に顔を歪めた。

「……は？」

「見間違いでないなら怪奇現象だ」

「や、やめろつて！」

再び令が震えあがる。

だが鷹槻はさらに続ける。

「前にお前が言ってた半魚になった先祖が出歩いて生贄を求めてるんじゃないか？」

「や、やめろつてーっ！」

「怪奇現象かお前の思い違いか。二つに一つだ、令」

鷹槻の断言ぶりに、令は青ざめて力なく椅子にもたれかかった。

「お、思い違い……思い違い……俺は何も見なかった……見ナカツタ……」

遠い目をしてぶつぶつ呟く令を遠巻きに見ながら、律は頬杖をついて鷹槻を見た。

「お前の口から生き神サマについて出るとはな」

「半魚様だろ？」

意味ありげな律の視線をさらりとかわし、鷹槻は言っただけ。

「令の知らない綾峰の誰か。見間違いか半魚様以外にはいないしな」

「……半魚様、な」

「すごいねー令。生き神様に会えたなんて、ラッキーだよ！」

四葉の揚々とした言葉に令はますます震えあがった。

「ややややめろつて！ あれは違う、見間違い、見間違い……！」

「いいなー。令は生き神様に会えてー」

につこりと笑う四葉に、妙に静かな表情を浮かべる律。

結恵はそれを見ながら、二人はが『生き神様』についてある程度  
気付いているんだろうと、ぼんやりと思った。

「千歳。今朝、外出たの？」

綾峰家の生き神様こと、千歳。綾峰本家屋敷地下にてこっそり軟  
禁生活中。

その軟禁部屋にやってきての結恵の開口一番の言葉に、千歳は軽  
く目を見張った。

「今朝？」

「朝の四時頃、敷地内歩いてたんでしょ？」

「午前四時頃お……？」

千歳は読んでいた通販カタログを膝に置き、口元に手を当てて考  
え始めた。

何しろマイペースな彼のことだ。時間なんていちいち覚えていな  
いどころか、興味を失くした過去のことなんてもうすでに記憶の彼  
方なのだろう。

すると壁の一部がぐるりと回り、隠し扉から鷹槻が入ってきた。

当初は驚いたこの仕掛けも、今となってはすっかり慣れた。

「邪魔する」

「鷹槻」

「おー鷹槻。お前までどうした？ 今日珍しく早いな。まだ十時  
だ」

いつも二人が千歳の部屋を訪れるのは、屋敷の警備やら何やらの  
諸事情から深夜が多い。結恵は比較的千歳の部屋へ来やすいためそ  
う珍しくもないのだが、鷹槻の場合は確かに珍しい。

鷹槻は呑気に笑う千歳を見て、渋面で息を吐いた。

「お前、あんま明るい時にうるつくなよ」

「は？」

「令……四ノ峰分家の奴がお前を見て、半魚が生贄求めて出歩いて

るって怯えてるぞ」

半魚が生贄求めていると最初に言ったのは令ではなく、鷹槻だったと記憶しているが。

「半魚？」

千歳は何だそれ？　と言いたげに眉を寄せた。

鷹槻は勝手にソファに座って言った。

「お前のことだよ。綾峰の守り神の生き神様。あいつらの中では半魚ってことになってる」

いや、確か半魚の誤解は解けたんじゃないか。新たな仮説が生まれただけと言えばそれまでだが。

「何だよー半魚って。俺はちゃんと人間だぞ？　鱗もないし、えら呼吸もできないし、瞼だつてあるぞ？」

「細かいことはいいんだよ。とりあえず気味悪い生き神様が出歩いてたつてことになってんだよ」

「生き神様って俺のことか。けど気味悪いって何だよ？　俺のどこが気味悪いんだ！？」

別に千歳自身を見て気味悪いと言ったわけではなく、彼にまつわる様々な噂が勝手にそういうイメージを植え付けただけなのだが、この際鷹槻はそういったことは構わない。

「とにかく、今朝方に見知らぬ野郎が敷地内を歩いて本家屋敷のほうに歩いて行ってそのまま帰って来なかったって言いふらしてるバカがいるんだよ。本当は勝手に外に出るのってまずいんだろ？　これでうちの親父あたりに知られたら警備が厳しくされるぞ？　とりあえずしばらくは大人しくしとけよ」

「そ、そうだよ。私達も来にくくなるかもしれないし、あの三ノ峰のオッサンとかに知られたら絶対に千歳、しばらくは完全監禁生活だよ！」

千歳のこつそり外出癖は今年の二月、結恵と一緒に朝日を見て以来だ。「やっぱり外はいいなー」と言っていてあれ以来、たびたび人目を盗んで敷地内を散策しているらしい。

だけでもしそれが他人に知れたら、本来なら敷地内の大人達は大騒ぎだ。

「そつだなー俺も外れなくなるのは嫌だなー」

「だろ？ わかったら人目につくところで徘徊すんなよ、クソジジイ」

「それに他の人もびつくりするしね。本気で不審者扱いされるか、幽霊扱いだよ」

「んー……」

不満げに唸ったかと思えば、ふいに千歳は真顔になった。

「何だ？ どうした？」

「俺、今朝は寝てた」

「は？」

結恵と鷹槻は揃って声を上げた。

千歳は真剣な面持ちで二人を見る。

「だーかーら。俺、今日は外出てない。今日と言っか、昨日から。昨日は本を読んでたぞ。分厚い本だから読み終わるのに随分かったんだ」

そう言って千歳は随分分厚いハードカバーの本を結恵たちに見せた。

それを見た鷹槻はますます渋い顔をして片手で本を押しつけた。

「……あのな。お前じゃなかったら誰がこの嚴重警備の敷地内を歩けるんだ？ それも早朝から」

「だって俺じゃねーもん」

千歳はえらく不満そうに顔を背けた。

「「もん」とか言うな。気色悪い。大人しく認めるよ。親父たちには黙ってもみ消しといてやるから」

「だから俺じゃねーですー。こんな必死に訴えてるのに、お前は俺を疑うのか？ 俺のことが信じられないのか？」

千歳はまっすぐに鷹槻を見上げるが、とうの鷹槻は間髪入れずに頷いた。

「消去法でいっても俺らと同年代で、敷地内に入れて、本家に行く

必要があつて、それでもつてそんな朝っぱらから出歩くななんていう妙な奴はお前しかない」

有無を言わさぬ鷹槻の言葉に、さすがの千歳も眉を吊り上げた。

「お前……さつきから人を半魚呼ばわりしたり、気色悪いって言うたり、拳句疑つたり、ちよつと酷くないか？」

「お前の普段の行動が行動だからだろ？」

鷹槻も負けじと千歳を睨む。

何だか空気が不穏なものになってきた。

「俺がいつそんな疑いを招くような行動を取った？俺はこれでもこの窮屈な軟禁生活に甘んじて五百年近くもやってるんだぞ？想像つくか？五世紀だぞ、五世紀。最近でこそネットが発達してきたからヒマ潰しには事欠かないけどな、俺は本来家の中に籠つてられる性質じゃないんだ。外に出てサッカー観戦したり、遊園地行つて絶叫系に乗りたいと思つたりしても我慢してるんだぞ？それを何だ」

「お前が我慢してるのは知ってる。偉いとも思う。けどな、実際にお前はここ数ヶ月、好き勝手に外に出てただろうが」

「だからって人を半魚呼ばわりしたり、頭から決めつけて疑つてかかるとは何事だよ。俺はお前をそんな人間に育てたつもりはないぞ」「三年程度の付き合いで育てられたって何様だよ、クソジジイ」

二人の間に見えない火花が……。

どうしよう。止めたほうがいい、止めたほうがいいに決まつてるのだが。

「お前な、いつも言ってるけどもう少し言葉づかいを何とかしろ？俺は確かにこんなナリだが立派にお前の先祖だぞ。年長者には口のきき方を気をつけろって言っただろ。そんなんじゃ大人になった時にいくらお前の立場とは言え、他の奴らに示しがつかない」

「偉そうに言うな。だいたいお前こそもう少し年長者として威厳をもつたらどうだよ。通販で買い物してガキみたいに浮かれて、人をパシリにして買い物に行かせたり」

「仕方ないだろ。俺はに外出れないんだから」

「通販で買えよ」

「店舗販売のみだったんだよ」

「知るか」

ああ、何だか論点がどんどんずれていつてる気がする。

けど二人とも、ものすごく不穏な空気をまき散らしている。

「あ、あのさ。そんなことより今は令が見たのは誰だったのか……」

「結恵は黙ってる」

二人ぴったりのタイミングで同じ言葉を吐かれた。

「……はい」

怖い。かなり怖い。

鷹槻が怒っているのは一度見たことがあるけれど、千歳が怒っているのを見るのは初めてだ。

何にしても怖い。どうしたらいいのか。とてもではないが二人を止める自信などないし。

結恵は絶望的な気持ちになって未だ止まない口論を続ける二人を見た。

「とにかく俺が気に入らないのはだな、お前が俺の言い分を聞く余地なく原因は俺だつて決め付けてるところだ」

「仕方ないだろ？ 他にいないんだから。お前以外の誰が早朝から敷地内歩いてそれも本家に向かうんだよ？」

「だからそうだとしても、俺は違うつて言ってるのにそれを頭から否定してかかるってどうなんだよ？ 俺はお前とはそれなりの信頼関係築いてきたつもりだったけど、それは俺の過信だったか？」

「それとこれとは話が違うだろ。実際お前しか該当する奴がいない以上、疑うとか以前の話だ」

「お前は明らかに俺を疑ってるだろうが。さっきだって俺の普段の行い云々言っただろ？」

「被害妄想だ、クソジジイ。日頃の行いについては前々から思ってたんだ。世界長寿なんだからいい加減もう少し落着きを持てよ」

千歳と鷹槻はお互い一步も退かずに睨みあっている。

「あの、本当ちよつと……落ち着こう？ ほら、敷地内の監視カメラを調べるとか……千歳も外出てないって言ってるし、もしかしたら本当にどこかの家の誰かかもしれないし……」

「いいから結恵は黙ってる！！」

獅子が吼えるように鷹槻が怒鳴る。

あまりの迫力に結恵が固まっていると、千歳が口を挟んだ。

「おい。お前も十五にもなって、少しばかり虫の居所が悪いからって女に八つ当たると言っつのはどうなんだ？」

「あ？ るっせえよ。てめえには関係ねえだろ。クソジジイ」  
ますます鷹槻の機嫌が悪くなった。

（や、やっぱり私が口を挟んだせい……？）

けどだからと言って怒鳴られて気分がいいわけないけれど。むしろ怒鳴り返したいのだが……。

「そういう開き直って己の非を認めないところが子供だって言ってるんだ」

「お前に言われたかねえよ。お前が外出歩いてたって認めたら俺も謝ってやるよ」

いや、この様子じゃ謝ったとしても絶対に口だけだろう。絶対。

「謝ってやるって、お前は一体何様だ？ 悪い事したら素直に謝罪しろ」

「だからお前が謝ったら俺も謝るって言ってるだろ？」

「それとこれとは話が別だ。まずは結恵に謝れ」

「どう別なんだよ。幼稚園児にも分かるように説明してみせろよ」

あの鷹槻が小学生男子みたいなことを言い出した。

「屁理屈をこねるな」

「屁理屈はお前の専売特許だろ。俺のが屁理屈だって言うなら、それは千歳の影響を受けたからだ」

責任転嫁まで始めてしまった……一体これはどう收拾をつけたらいいんだろう。

「俺はそんなレベルの低い屁理屈はこねない」

「誰がレベル低いんだよ！」

「お前に決まってるだろ。何時何分何秒地球が何回回った時にとか言いだすようなレベルだ」

千歳のストレートな言葉に、小さくプチンという音を聞いた気がした。

「……やってられっか!!」

鷹槻は怒鳴りながら蹴倒す勢いでソファを立ち上がり、隠し扉のある壁へと歩いて行った。

「た、鷹槻!？」

「帰るっ！」

「結恵、ほっとけ」

冷静すぎる千歳の言葉に鷹槻は今にも噛みつきそうな顔をしたが、歯噛みしただけで乱暴に隠し扉を開いて出て行った。

力任せに閉められた回転扉はまだグルグル回っている。

「……た、鷹槻があんなに怒ってた」

何て希少なものを見たんだろう。

結恵は未だ座ったままの千歳に恐る恐る視線をやった。

千歳は不機嫌と言うより、呆れをその顔に滲ませている。

「千歳はまだ怒って、る？」

「ん？」

顔を上げた千歳は、もういつもの千歳だった。

さっきまで怒鳴りあっていたとは思えないほどすっきりした表情だ。

「俺は別に最初からそんなに怒ってないぞ？」

「あれだけ言い合っておいて!？」

結恵の率直な感想に千歳は苦笑した。

「そう言えば結恵が来てからはまだ一度もやってなかったか。鷹槻の奴と俺は前は三ヶ月に一回くらいは今みたいなケン力をしてたんだ」



「今みたいになつて……」

あの火花飛び散る大喧嘩を？

「鷹槻があんなに怒るの、少し意外……」

「うん。あいつはあんまり感情を表に出す方じゃないからな。今よりもつとガキの頃は随分抑圧された環境に置かれてたらしいし」

少し困つたように笑つて千歳は続けた。

「あいつの父親……二ノ峰の義鷹は結恵も会つただろ？ 義鷹はああいふ奴だし、養父つて言つてもあんまり親子らしくないんだよな。母親のほうともうまくいつてないらしいし」

「うん……」

リクの部屋で鷹槻とその養父である二ノ峰戸主が顔を合わせた時、敵意を隠す気もなかった鷹槻。とても養子とはいえ我が子に向けるものとは思えない視線を向けた義鷹。

「俺が初めて鷹槻と会つたのはあいつが十二歳の時。それまでも存在自体は耳にすることはあった。桂子の亡夫の子供で、表向きは二ノ峰の二男つて。俺に会わせるかで一族は随分もめてたな。俺に会わせるつてことは本家直系血族ではないにしろ、鷹槻を本家の人間と認めるのと同じことだから」

本家を絶対視する綾峰の大人達。

微妙な立場の鷹槻を本家として認めるか否か。

その様子が目に浮かぶようで、苦いものが胸に広がった。

「桂子の夫は分家からの入り婿で、正式には本家の人間じゃなかったからな。……ああ、そんな大人の汚い事情はいいな」

千歳は顔を強張らせていた結恵を気遣うように零すように笑い、話を切り替えた。

「とにかくあいつに初めて会つた時さ、何つーガキだつて思った。もうじき中学生つて子供が冷めきつた目えして妙に達観したような顔して。当たり障りない話し方をして。……全力で他人を近寄せないようにしているみたいだった」

軽く目を伏せ、長い睫毛が千歳の端整な顔に影を作る。

「ちょっとからかってやろうと思って可愛げないガキーとか言っても、あいつ全然反応しなかったんだ。耳に入っていないのか気にする必要がないと思ってるのか、それとも言われることを当たり前と考えていたのか……俺にはわかんないけど」

確かに鷹槻は同世代の人間の中でも特に大人びていて、どこか冷めたところがある。まだ半年程度の付き合いだが、彼が感情らしい感情を剥き出しにしているところなどほとんどお目にかかったことがない。

「結恵はケンカってするか？」

唐突に千歳は訊いてきた。

「ケンカ？」

結恵は軽く面喰いながらも過去の記憶を手繰り寄せていった。

ケンカ……そう言われて真っ先に思い浮かんだのは、この家に来る前のこと。

この家に留まる決意を固めさせた、夏の日 of 出来事。チクリと胸の奥で古傷が痛む。

「あ。ケンカって言っても仲直りできるやつ。ガーッと怒り合っても、後には関係修復できるやつな？」

結恵の心情を察したかのように千歳は付け足した。

「関係修復できるケンカ……」

少し考えてから真っ先に浮かんだのは、

「律、とかかな。後は四葉たちと令をいじり倒したり」

「四ノ峰のガキ共？」

「うん。律はケンカっ早いから、私だけじゃなくて薫子とも演武みたいに凄いケンカもするし、令のこともいじめてるけど。だから私も気が長いほうじゃないからけっこう激しく言い合うよ」

「そっか。でもその後もちろんと気まづくなったりはしないんだろ？」

穏やかな口調の千歳に、迷うことなく頷く。

「まったくならない。一日経つと忘れるところかね、三時間経つと

何が原因でそんなにやりあってたのか忘れる」

「義将とかとは？」

「おじいちゃん？」

一年前に亡くなった祖父は……。

「まあけっこう怒られたから普通に。小さい頃とか。泣きながら反抗した時期とかもあったし」

幼稚園くらいの頃の話だけれど。祖父は怒ると怖かったし。両親も怒ると怖いけど年齢を重ねている分、一番威厳があるというか怖い怒り方をするのは祖父だった。

「おじいちゃんの盆栽にボールぶつけて壊したのを黙ってた時は本当に怒られたなあ」

今思うと本当に怒られた理由は、悪い事をしたのに黙っていたことなんだってわかるけれど。でもあの当時は盆栽の一個や二個でそんなに怒らなくてもって大泣きして部屋に閉じこもった。

「でも結恵は、義将のこと嫌いじゃないんだろ」

「……うん」

嫌いなわけではない。怒られて腹が立ったこともあったけど、それでも大好きな家族だったことは変わらない。

「義将も、結恵のこと大事に思ってたって桂子から聞いてる」

千歳は柔らかに笑って言った。

「土台に信頼関係があるからケンカしてもまた元の関係に戻るんだよな。義将はなかなかいい家族関係を築いたらしい」

「……悪くはなかった、と思うよ」

本当は間違いなく良かったと思うけど。けどそう言うのは何だか照れくさい。

つい俯いていると千歳が小さく呟いた。

「うらやましい」

聞こえるか聞こえないかというほどの声に、結恵は弾かれたように顔を上げた。すると千歳がどこか寂しげに笑っていた。

「千歳？」

「俺は嫁さんもらうまで、そういうケンカしてたことなかったから」

そうだった。千歳は今も昔も隠されてきた存在。

今はその希少な性質から大切に……守るという名目で捕らわれている。

だけど昔は、兄と同じ顔をした不気味な存在と疎まれてきたという。

両親からも兄弟からも離れて育ったと聞いたのは半年ほど前のこと。

「俺はケンカ出来る相手がいるってのが、悪いことじゃないって知ったのはけっこう経ってからなんだ」

伏し目がちに千歳は笑う。

「鷹槻を見てるとさ、時々俺のガキの頃を思い出すんだ。神隠しに遭って帰ってきて……血の繋がった両親兄弟と暮らすようになって、けどうまく付き合えなかった頃のこと。だからつい、あいつを構いたくなるんだよな」

「だから、千歳がケンカ出来る家族になったの？」

千歳は曖昧な笑みを浮かべた。

「そんな大層なものじゃないな。単なるお節介ってやつ。ほら、最近はキレル若者とかって増えてるんだろ？ あいつもたまには怒ってストレス発散させておかないといつかキレルんじゃないかと思ってるさー。鷹槻みは秘密な？ わざと怒らせてるなんて知れたらまた可愛くないこと言いだすから」

本当はきつともう、鷹槻だって気付いているだろうに。

人目につかないようにしなければならぬにも関わらず、頻繁に千歳のもとを訪れる彼を見ればわかる。

「……鷹槻は頭いいから、きつとわかってるよ」

結恵の言葉に千歳は言葉なく緩く微笑んだ。

本当は千歳だって結恵が言うまでもなく分かっているのだろう。こっという時、二人の間の繋がりが少しうらやましくなる。

結恵が出会うより三年早く出会い、培われた二人の絆が。

「それにしてもどんどん口論がエスカレートしてって冷や冷やしたよ。二人とも今まで見たことのない剣幕で言い合ってるんだもん。怒ったフリにはとても見えなかったよ」

つい先ほどの激しい口論の様子を思い出し、結恵は息を吐いた。

「……んーまあ、フリだけじゃないし？」

「え」

千歳は少しばかりばつが悪そうに頬をかいた。

「いや、俺も最初は怒ったフリとか思ってたんだけど、気づいたらつい本気になってたりとかさ」

「……」

「そんな目で見るなよ。だってアイツも酷いじゃんか。半魚とか言われるわ、俺が違うーって言っても信じてくれないわ」

千歳は拗ねた子供のように口を尖らせた。

「そう言えば、本当に千歳じゃないの？ 出歩いてたのって」

「何だよ、結恵までそういうこと言うのかー？ 俺は違うって言うてんのに」

「だ、だって！ 千歳じゃなかったら誰でもないってことでしょ！？」

結恵は青ざめた顔を両手で覆う。

「ほ、本当に千歳じゃないの！？」

「……結恵。怖いのか？」

そう言った千歳の表情が意地悪げな笑みを含む。

「こ、ここ、怖いんじゃない？ 不気味なの！」

やばい。噛んだ。これでは怖いと言ってるも同然だ。

「ほ、ほら！ 防犯上の問題もあるし！ 本当に不審者でも入り込んでるんだつたら私達だけの問題じゃなく綾峰家全体の問題にもなりかねないし！」

「うんうん。そうだなあ」

にこにこ頷く千歳の生暖かい視線が何とも言えない。

「……本当の本当に千歳じゃないの？」

「結恵はどっちがいい？」

花が咲くような笑顔で聞いてくるのがまた腹立たしい。

「つやつぱり千歳でしょー!？」

「うんうん。じゃあ俺だね？」

綺麗だけれど胡散臭いことこの上ないその笑顔からは嘘か真か測れない。百パーセント彼だと言いきれないから嫌になる。

「結恵ー？ 顔が青いぞー？」

笑顔だ。ものすごくいい笑顔だ。

そんなに人をいたぶって楽しいのか、このギネス御長寿は。

「いやー本当怖いなあ。本家に向かってたんだっけか？ その人影は。誰なんだろうなあ」

「そ、そんな棒読みで何が怖いのか」

「いや怖いだろー？ 亡者がうるつく閉ざされた富豪一族の屋敷……」

「や、やめてよ!」

だが千歳は嬉々として続ける。

「一人、二人……順番に消えていく血塗られた一族」

「いーやーっ!」

「ある者は代々伝わる歌に則って。ある者は不可解な血文字を壁に残して。またある者は古い人形に見立てられて……」

「あーっ! 聞こえない聞こえないーっ!」

「っていう展開だったら怖いなーと」

無邪気な笑顔を向け、千歳は言った。

対する結恵は涙目だ。

「……ち、千歳の鬼っ! 悪魔っ!」

「鬼に悪魔って、酷いこと言っなよー」

「酷いのはどっちさ!」

クッションを投げつけながら、結恵は眉を吊り上げた。それを片手で受け止めながら、千歳は声を上げて笑った。

「あはは。だつて結恵があんまり楽しい反応してくれるからさー」  
「！ やっぱりからかったの！？」  
「ん？ 外で歩いてたかってこと？ あーうん。もういいよ。からかったーってことにしてあげよう。でないと結恵が今日から夜一人で眠れなくなっちゃうもんなー？」  
子供をあやすような声音に、結恵は顔を真っ赤にして立ち上がった。

「くっもういい！ 千歳の意地悪いさん！」

「じいさんて……結恵まで反抗期か？」

「人を怖がらせて楽しむからだ！」

「あ。やつぱ怖かったのか」

千歳の呟きに、結恵ははっとして固まった。

「そっかーごめんなー？」

につこりと笑う千歳が憎い。

「っ！ もういい！ 自分で監視カメラの映像チェックしてくる！

！ お邪魔しました！！」

結恵は肩を怒らせ足音荒く部屋を後にした。

それを笑顔で見送った千歳はソファにもたれかかって息を吐いた。

「……かわいいもんだなあ。うちのガキどもは」

翌朝、やってきた客は少しばかり珍しい相手だった。

「お早うございます。千歳さん」

千歳はソファの上で丸まったまま、その客人を見上げた。

「あー……桂子？ 何だよ、珍しいなー。まだ朝だろ？」

大きく欠伸をしながら、千歳は身を起こして向かいのソファを桂子に勧めた。

綾峰桂子<sup>けいこ</sup>。綾峰の現当主であり、綾峰家の最高権力者。結恵の大叔母にあたる彼女は上品に微笑み、勧められるがままにソファに腰を下ろした。

「結恵さんは昨夜、あまり眠れなかったようですよ」  
につこりと顔は微笑んでいるがこれは怒っている。

千歳は笑顔で誤魔化そうとするが、七十を超えた彼女はそうそう誤魔化されてもくれない。

「あまり若い方たちを無闇に怖がらせないで上げて下さいね」

「あはははは……怖がってないって本人は言ってたんだけどなー」  
「千歳さん」

少しばかり強い調子の声に、千歳は乾いた笑いを収める。

「監視カメラに不審者が映っていないかと四ノ峰分家の子息と鷹槻さんが確認したそうですよ」

「あーそうなんだーあ」

「結恵さんも今朝がた確認したいと申し出てらしたので、どうしたのかと尋ねました。……話は概ね、伺いました」

桂子の笑顔は無駄に迫力あるものとなって千歳に向けられた。

「監視カメラには誰も映っていなかったそうです。そうでしょうね。貴方は何処に監視カメラがあるのかなど、熟知しているでしょうか」

「やーそうでもないけどさ」

「……貴方の悪癖はまだ治っていませんでしたか」

桂子の低い声と、滅多に見られない鋭い眼差しが千歳を追いつめる。

これはまずいと千歳は軽く身構えた。

「六十年ほど前にも本家屋敷を徘徊する影、という怪談がありましたね？」

「あはははは。そんなのあったっけ？」

さつと顔を逸らす千歳。

鋭い目を向ける桂子。

「ありました」

「……そっかー」

「仕込んでおいた食材がいつの間になくなっている。見覚えのな



い若い人影を見かけた。他にも色々ありましたね。当時幼かった私は泣きながら兄のもとへ行きました」

「そうだったんだー？」

「ええ。他にも昔から当家には色々と奇妙なことがあったようですね」

「さー？ 俺は知らないけどー」

「千歳さんっ」

桂子の思いもよらぬ大きな声に、千歳は思わず身を竦ませた。

「全て貴方ですね？」

「……いや、その」

「兄にすら認めなかったと聞き及んではいますが貴方の他に、該当する者はありません」

「えーとだな」

「私も今になれば、若い方たちを怖がらせてみたくなる気持ちがわからなくありませんが」

桂子は盛大に溜め息を吐いた。

「貴方なりの可愛がり方だということは今となればよくわかりますが、今朝の結恵さんの目の下のクマは酷いものでしたよ」

「あーそれはそれは」

「昔から度々本家屋敷に仕える者たち、それより以前は一族の子供達の間で、実態のない亡霊がうついついていったような怪談が流れることは多々あったようですね」

千歳は笑顔を崩さず、桂子の言葉を黙って聞いている。

桂子は再び溜め息を吐いた。

「幽霊の正体見たり枯れ尾花。知っている者から見れば小さな話に怯える子供達を見ることが楽しいということとはわからなくもありません。ありませんが、貴方のそれは度が過ぎます！」

ぴしゃりと言い切られ千歳は情けなく笑った。

「桂子も昔はすぐ怖がって泣いてなのになー」

「ええ。随分貴方の遊びに付き合っただけ泣きましたとも。貴方に伺っ

ても『何も知らない』の一点張りでしたし、兄が貴方を疑えば拗ねてしまわれるし……」

昔から時折、綾峰家には奇妙な怪談が流れることがあった。

多少違いはあれど、その全ての根底には『いるはずのない人間が一族内をうろついている』というもの。いるはずのない人間の正体を知る者は少なく、時には警備上の問題などとして大騒ぎになることもあったがその正体が賊であったことなどは一度もない。

その時々の一族の権力者によって全て無かったことにされてしまふ。

長くこの家で生き、桂子もその意味に気づいた。

「あまり皆さんを怖がらせて遊ぶことも、控えてあげて下さいね」

「……んー」

千歳は曖昧な返事をして、毛布をかぶって再び丸まった。

それを見て桂子はよろしくお願いしますねと念を押して部屋を出て行った。

扉が閉まり、部屋にはまた静寂が訪れた。

そして瞼を閉じれば、闇の向こうに光を見る。

その光の中に、自分と全く同じ顔形をした子供がいる。

『昭三。見ろよ、これ』

その手には手足をバタバタさせる蛙。かえる

『草次郎。そんなの見たら女連中が悲鳴を上げるぞ？』

だがそう言っても双子の兄が聞き入れるはずもない。

『いいからいいから。これを水瓶に仕込んでだな』

『あーあ。最近入った新しい女中が泣くな』

そして同じ顔を見合せて二人、笑い合う。

案の定、水瓶に仕込んだ蛙はみね屋の女中たちの悲鳴を呼び、双子の兄弟は揃って父に呼び出された。

だが父の第一声はこうだった

『昭三。お前がやったのか』

有無を言わさず、父は弟である彼を睨んだ。

『峯家の男子があまり愚かな振る舞いをするんじゃない』

『……ち』

違うことは、ない。

草次郎と共にいたずらをして笑っていたのは確かに自分だ。だけど。

（何で俺だけなの？）

『ち、父上！ ごめんなさい！ 俺が昭三を誘ったんです！』

『何？』

草次郎がそう言わなければ、永遠に自分は父からひとり疑われ続けたのだらう。

疑われる土壤があつたわけじゃない。

ただ峯家では何かあつた時、疑われるのが自分の役目だったただけだ。

忌み嫌われる畜生腹の子として。

それは当り前のことだったが酷く寂しく、虚しかった。

誰にも自分の言葉は届かない。

皆、自分を信じてはくれない。

それは自分が信ずるに足りない者だから。

それだけの信頼関係を築いていないから。

そう理解はしても、時折頭の片隅から寂しさが首をもたげた。

妻を迎えて子供達が生まれて、初めて無条件に自分を受け入れてくれる人が出来るまで。

思えばケンカをして仲直りというものをしたのも、彼女らが初めてだった。

それからたくさんの『子供達』とも。そんな彼らが可愛くてついついいたずら心が芽生えてしまい、からかってしまうクセが出てはまたケンカした。

「……悪いクセだとは思ってるんだけどなー」

鷹楓の端から疑ってかかる態度にムツとしたとは言え、図らずも本気で結恵を怯えさせてしまったようだ。その鷹楓も、結恵が千

歳を構ってばかりいることが気に入らないという可愛らしい嫉妬心から自分に食ってかかることくらいわかってるのに。

「けどだからって、一応俺が違うって言うてるのに頭っから否定しなくたっていいよな」

まあこちらもう嘘を吐いたのだからお互い様だと言えなくもないが、だがやはり、嫉妬心からとは言えあんなに頭ごなしに疑われるのは面白くない。

「ま、いつも通り一週間くらいしたらメールするか」

鷹槻とケンカをした後。ぶつとりとここを訪れなくなる彼に一週間ほど時間を置いてから何事もなかったようなメールを送り、そしてまた彼がここを訪れ何となくいつもの関係に戻る。

三年ほどそれを繰り返してきた。

メールの内容は何かを買って来てくれと言うようなものだったり、美味しい茶を手に入れたから遊びに来いと誘うようなものだったり、色々だが、ケンカしたことについてはお互い一切触れない。

それが千歳と鷹槻なりの仲直りの仕方だった。

「けど結恵はどうしたものかな」。全部ウソでしただって言うのもつまらないしな」

悪い事をしたと若干の罪悪感はあるけど、それを改める気がないのが千歳だ。

「……何か魔除けっぽいものでも通販で探してみるか」

ネットでその手のものを漁れば腐るほどヒットするだろう。

「うん、そうしよう。でもってそれを霊験あらたかな由緒ある魔除けとか何とか言って渡してやろう。そうしよう」

千歳はソファから起き上がってパソコンの前へと向かった。

「何たるなー魔除けって言うといワシの頭と柊つぎやねとかか？ いやあれは節分限定か？ あーでも結恵は女の子だしもつとかわいい物の方が喜ぶか？ なんかリボンついたワラ人形とかないかな」

上機嫌にキーボードを打ちながら、千歳は上機嫌に画面に見入る。「ついでに鷹槻好みの茶でも注文してー、お。この般若の置物なん

てりボンついてるし結恵にいつか」

それから千歳からのそうとは知らされないお詫びの品に結恵は更に怯え震えあがり、鷹槻へのメール送信が遅れ、三人が『仲直り』して平和な日常が戻ってくるのには一週間より少し長い時間がかかる。

だが元通りになつて三日もした頃には微妙なケンカ状態になつたという事実も忘れられるほど、平和な時が過ぎて行つた。

「平和だなー。何か面白いことないかなー。ちょっと外にでも出てくるかな」

「何言つてやがる。平和で悪いことなんてあるか、クソジジイ」

「あ。このチョコ美味しい」

「だろー？ それ限定何品とかいうやつでさ、買うのすっぱー苦労したんだ。……で、何の話してたっけ？」

「平和の話だっけ？」

「とうとうボケが回ってきたか。クソジジイ」

「ボケでもないし、そのクソジジイ呼ばわりもやめろって言うてるだろうが。だいたいお前はー……」

「るっせえな。モウロククソジジイ」

「やめなよ、鷹槻。そりゃいくらなんでも失礼でしょ」

「そーだそーだ。年寄りをいじめやがつて。結恵はいい子だなー？ お小遣いやろうなー？」

「もう完全にジジイじゃねえか。いつも俺らのことガキ扱いしやがつて」

ぼそりと呟いた鷹槻に千歳は無言でクッションを投げつけた。顔面に直撃して鼻を押さえる鷹槻を見ながら千歳はにっこりと笑つた。

「だつてお前ら、俺の子供だし可愛がりたくなるだろ？」

了

## ひとり、それから。（後書き）

この話は当初ちょっとホラーテイストで思っていたのですが、結局悪ふざけがすぎる千歳の話になってしまいました。悪ふざけ大好きですが千歳なりの愛情表現なんです。屈折しているけれど彼なりに全力で愛情表現しているつもりなんです！

しかしこの番外短編は色んな千歳を書いて楽しいなと当時すごく嬉しかった思い出があります。改めて掲載するにあたって見直しても文章や構成の甘さに泣き叫びそうにはなりますが、でも千歳書けて楽しいか思っていました。

そんな番外短編三作目、おつきあい下さりありがとうございます！

## 薄夜の音（前書き）

こちらは本編よりかなり前の時代、明治時代末期くらいが舞台になります。

## 薄夜の音

「逃げてもいいんだぞ」

「逃げませんわよ」

そう答えると、彼は本から顔を上げ彼女と目を合わせた。

その視線を正面から受けとめ、彼女は続けた。

「得るものだけ得て、その代価を支払わず逃亡するなど恥知らずな真似は致しません」

まっすぐでどこまでも澄んだ瞳は、彼女が彼の背丈の半分もなかった時分からまるで変わらない。

「失うもののほうが多いだろう」

「それが『当たり前』の者として生まれた本家の者の宿命です」

彼女、笙子しやうこは眉ひとつ動かさず、一切の動揺を見せずにそう言うてのけた。そして彼が何か言うよりも先に口を開く。

「お逃げになるならわたくしより貴方でしょう？　貴方はもう、四百年はこの家に捕らわれている」

「ああ、もうそんなになるか」

「なりますわ。明治天皇が即位なさってから四十年にもなりますのよ。その十乗ですわ」

「早いなあ」

あまりに呑気すぎる彼に、笙子は眉根を寄せた。

「……わたくし、貴方が嫌いですわ」

「それは手厳しい」

そんなこと、微塵も思っていやしないのに。

今だつてまるで壁のようにしか感じられない作り物の笑顔で牽制してくる。

「貴方のその流されるがままの生き方、大嫌いです」

「うん、俺は流されるがままに生きてる」

彼はいつもこうだ。



どんなに強い風が吹こうとも、風に逆らうことなく己を殺してやり過ぐす。

自らの思いを口にすることなく義務という名目の下、個を殺している。

初めて彼に会った時から変わることなく、彼はそうして生きている。

否、笙子に出会うよりずっと前から彼はそうしていたのだろうし、笙子が老いてやがてこの世に別れを告げる日が来ても彼はきっと変わらないのだろう。

「笙子は流されるままに生きる性質じゃないだろう？」

唐突に彼はそんなことを言ってきた。

笙子は軽く目を見張ってから背筋を伸ばして答えた。

「当然ですわ。ですからわたくしはわたくしの意志の下で生きます。例え『当たり』の者として生涯この家に縛られようとわたくしの意志は譲りません。他者に指図される気は毛頭ございませんのよ」

「近頃の女は強いなあ」

相も変わらず呑気な調子でそんなことを言う。

「婦人運動が盛んになってきたとは聞いたけど、近頃は女学校もそういう影響を受けているのか？」

「先生方はそのような考え、良しとは致しませんわ。あくまで殿方と御国に尽くす良妻賢母たれと説かれますが、いつまでもそのようなことを言っているようでは世に取り残されてしまいますわよ」  
つい先日卒業したばかりの女学校では女は男の後ろで支えろと、そのようなことばかり言われた。

まるで女は考えることなど必要ない。全て男に従えばいいのだと言わんばかりに。

「女は殿方の眷属けんぞくではございませんわ」

「うん。それはそうだ」

「そのように仰る方は数少ないですけど。軽々しく口にすればすぐさま生意気だ、恥知らずだなどと罵られますのよ」

「そういう時代だからな。だからと言って、全ての男が女を道具のように思っているわけではないさ」

「……少なくとも、お父様やお兄様はそうではないように思えますけれど」

笙子の父と兄、綾峰本家の当主とその後継者である二人は正妻がありながら幾人もの妾を囲めかけっている。父は跡取りである兄が生まれてからは母への関心は薄く、その息子である兄も似たようなもので子供さえ生まれれば正妻でも妾でも構わぬといった素振りを隠そうともしない。

彼らにとって大事なものは綾峰の家名と権威、財力だけだ。

女はそれらを残すための道具としてしか考えていない。

「あの方たちは保身しか頭がない。私やお母様やお義姉様のことも、道具としてしか思っていない」

吐き捨てるような言葉に、彼は柔らかな声で言った。

「だから縁談を片端から反古ほんこにしていくのか？」

大嫌い。

そう胸の内で呟く。

そうやってさしたる興味もなく訊いてくるところも、とても嫌いだから笙子も顔を上げ、毅然とした態度で答える。

「そうですわ。お父様方が連れてくる殿方は皆当家の威光に媚へつらい、自ら考えることを放棄し怠惰に生きる方ばかり。お父様達と同じように。そのような方と一生を添い遂げるなど、「冗談ではありませんわ」

彼はほんの少し、困ったような呆れたような顔をして笑んだ。

「だから逃げてもいいって言っているのに。俺は追わないから」

その一言に彼の頬を張り飛ばしてやりたい衝動な駆られたが、両手に力を込めて必死に抑え込んだ。

「……逃げなどは致しません。わたくしが認めた殿方を探せばいいだけですもの」

「難しいだろうな。笙子の見る目は厳しいから」

彼はそう言つて、零すように笑つ。

「流されるがままに生きることは楽だから、笙子が望むような人間はそうそうお目にかかれないうな」

「貴方のような方ばかり」

刺々しい笙子の言葉にも彼は構うことなく頷く。

「そう。だから世の大半の人間は流されるままに生きている。望んで流れに逆らう人間は少ない。下手を撃つたら官憲かんけんに取つ捕まりかねないしなあ」

「この綾峰の外の世界のことなどは今は話しておりませんわ。わたくしが申しているのはこの閉鎖的な家の内のことです」

「この家の中だつて同じことだ。官憲こそいなくとも似たような役割はあるからな。表沙汰にならない分、官憲より余程怖いかもしれない」

彼が言つのは笙子の家の分家に当たる家、三ノ峰と称される家のことだ。

保守的なこの家の番人……否、看守のような役目の家の人々。

彼らが看守なら、牢獄は男爵家とは名ばかりのこの本家の屋敷だ。各界の要人への披露目が済んだばかりのこの西欧式の屋敷も笙子にしてみれば、ただ外観に金銭を投じただけの巨大な監獄だ。

「ですが当家の者達が保守的なことと、三ノ峰の存在は関係ないように思えますわ。一族ぐるみで生来異常なまでに保守的なだけに思えます」

「そういう風にこの家は永らえてきたんだ。今更冒険しましょうと言つて喜んで安寧を捨てられるような立場にある奴は殆どいない」

「意気地なしです」

「皆、守るものがあるだけだ。自分自身だけでなく一族郎党を路頭に迷わせるわけにはいかないだろう？」

「それはそうですが」

「お前の言つ保守的な一族のおかげで俺もお前も不自由なく過ごせるんだ。だからあまり悪く言つてやるなよ」

彼はあくまで穏やかに、優しく子供をたしなめるように言った。  
彼は怒らない。

昔から幾度となく彼と顔を合わせてきたけれど、怒っているところなど見たことがない。

喜怒哀楽の楽しか見せたことのないような人だ。

だから何を思っているのか、笙子には到底計り知れない。

待遇だけが良い監禁にも等しい生活を強いられながら、彼は一度として不平を述べた事はない。心情を語ることなど滅多にない。

ただ表面上の言葉だけを口にして彼は生きている。決してその胸の内を明かすことなく。

「貴方は……不満はありませんの？」

「何に？」

「何でも構いませんわ。貴方の置かれる現状にでも、周囲の者達に對してでも」

「そんなものないよ」

そう、今までで一番柔らかな笑顔で彼は一寸の迷いもなく答えた。  
尋ねた笙子のほうが気後れしてしまうほどはつきりと。

「大事な子供達が側にいて……少し変わった形でも俺を必要としてくれる。それだけで十分だよ」

そうは言うのにそれがどこか寂しげに悲しげに見えてしまうのは何故だろう。何故だろう。

笑っているのに、泣いているように見えてしまうのは何故だろう。

「……寂しくはありませんの？」

「笙子も嫌々そうにでもたまにはこうして顔を見せてくれるし、毎日食事を運んでくる使用人相手に話したりはする。寂しくはないよ」

「そうではありませんわ、そうでは」

笙子は膝の上で手を握り締め、唇を噛みしめた。

「……それでも貴方は、独りでなくてはならないのでしょうか？ わたくしの祖先達もいずれはお父様やお兄様やわたくしだって、皆貴方より先に死んでゆく。最後に残るのは貴方ひとり。……寂しくは

ありませんの？」

どうせ返ってくる言葉などわかりきってはいるけれど。

彼は今まで一度だって自分の望む言葉をくれたことはないのだから。

「大丈夫だよ。俺は大人の大人の大人くらいの年齢だから、寂しがったりなんてしないよ」

ほら、やっぱり。

「っそうですわね。貴方にとって、わたくしも他の綾峰の者も何の意味もない存在ですものね！」

「笙子」

「大嫌い……大嫌いですわ！ 貴方など……わたくし達が大事ななんて言って、本当は路傍の石程度にしか思っていないくせに！」  
意味などない。

他人にどんなに想われようと、周囲の誰がどのような思惑を持って近づいてこようと、彼自身にとってはどちらも大差はないのだ。彼にとって、他人などその程度でしかないのだから。

人前で感情を晒すなどはしたない。

家でも女学校でも嫌という程に言われたし笙子自身、そのような無様な真似をするはずがないと今まで思っていたのに。

……何て惨め。

「笙子」

「大嫌い」

興奮に任せて涙まで溢れてきた。

本当に何て無様。

だから彼は笙子になど関心がないのだ。

幼い頃から少しでも彼の関心を引きたくて努力してきたけれど、少しもうまういかなかった。

綾峰男爵家の娘として恥じない人間になろうと努力してきた。彼にとって必要不可欠な『当たり』だとわかってから、他の幾多の一族の人間よりも誰よりも彼に近い存在になれると喜んだのに、彼に

とってそんなことは大した意味もないことだった。

「っ大嫌いです、貴方など、大嫌い……」

彼はじつと私を見ていた。

触れるでもなく、呆れるでもなく、叱咤するでもなく。

ただじつと。

それほどまでに自分はどうでもよい存在なのかと思うとますます涙が溢れてきた。

「……千歳様など、大嫌い」

思わず口から零れ落ちた言葉に彼の、千歳は目を見張った。

そして少し困ったように眉を下げ、小さく笑った。

「ああ、名前を呼ばれて大嫌いって言われるのは堪えるな」

その呟きに涙で汚れた顔を真っ直ぐに彼に向けた。

彼は少しだけ、ほんの少しだけだけれど、傷ついたような笑みを浮かべている。

「……わたくし、今まで幾度となく貴方に大嫌いと言いましてよ」

「うん。もう何年も言われてる。けど名前を呼んで言われたのは初めてだ」

「名前を呼んで言うことはそんなに差がありますの？」

「あるよ。ああ、俺に向けて言われたんだなって強く自覚させられる」

「……ではもつと早く言うべきでしたわ。貴方はわたくしが何を言おうと、気にする素振りなど見せやしなかったではありませんでしたもの」

「子供の癩癩は可愛<sup>かんしゃく</sup>いから」

「癩癩などではありませんわ！　そもそもわたくしがどのような憎まれ口を聞いても貴方はいつもいつも笑ってばかりで」

「うん。笙子は怒っても八つ当たってきても可愛いから」

「……人にいたぶられることを好む性癖が有り？」

「違うよ。俺の大事な子供だから何をしても可愛いんだよ」

苦笑して彼は絹のハンカチーフを笙子の濡れた頬にあてた。

「せつかくの美人が台無しだ」

「……そのようなこと、思っていないくせに」

「思ってるよ。笙子は俺の一番の器量よしだった娘にそっくりの美人だ」

「わたくしはその方にお会いしたことがないからわかりませんわ」

「俺が保証するよ。遠方の村まで評判になるほどの美人だった」  
そう言つて彼は朗らかに笑つてみせる。

それだけで無条件に信じられてしまうような、そんな笑顔だ。

「とても気が強くて我が強くて、性質も笙子によく似ていたな」

「わたくしは我を張り通したりなど致しませんわ」

「知らないつて怖いな」

意地悪げに彼は笑つて少し乱暴に笙子の涙に濡れた顔を拭つた。

「何ですのそれ。莫迦<sup>ばか</sup>にしてらっしゃる？」

「まさかあ。俺が可愛い子供相手にそんなことするわけないじゃん」

「とてもそうは見えない顔をしてらっしゃるの、ご自分でもお分かりになつて？ 鏡はあちらですよ」

笙子は顔を拭われたまま、彼を上目遣いに睨んだ。

「鏡なんて見なくなつて、俺が誠実実直な顔をしているのはよく分かつてるから見なくていいよ」

「白々しいこと」

真つ赤な目を据わらせる笙子に、彼は声を上げて笑つた。

「わたくしと貴方のようなふざけた方が血が繋がっているだなんて、到底思えません」

「思えなくつても事実だから仕方ない。現実見ようよ」

そう、にこにここと晴れやかな笑顔で言ってくる。まるで彼の方がずっと子供のように見えるような笑顔で。

「言われずとも見ております」

胸を張つて笙子が言つと、彼はハンカチーフを持った手を引つ込め、そつかと笑つた。

そして壁に掛けられた柱時計に目をやった。

「さ、もうこんな時間だ。そろそろ階上に戻るといい」

「そんなにわたくしがいると邪魔ですか？」

「まさか」

少し顔を強張らせた笙子に対し、千歳は大げさなまでに大きな声で言った。

「可愛い笙子を引き留めておきたいのは山々だけど、夜更かしは美容に良くないんだろう？ 二ヶ月前に来た時に言ってたじゃないか」

ああ、確かにそんなことを言った。そんな憎まれ口を叩いてこの部屋を後にしたのだ。

「よく覚えていらつしゃいましたわね」

「だって笙子の言った事だから」

嫌になる。

その気もないのにこの人はいつも臆面もなくそのような台詞を吐いてみせる。

（本当にずるい方……）

笙子の気持ちなど、もうとうの昔に気づいているはずなのに、気づいている素振りなどこれっぽちも見せない。

見せないくせに、『大勢の子供の中の一人』としては特別に可愛がってくるから嫌になる。

笙子がなりたいのはそうではない。そうではないのに、彼は子供として可愛がるという形で笙子の想いを否定する。

だから、大嫌い。

これ以上にはなれない、ならせてもらえない。

彼は笙子を何時までも我が子の一人としてしか扱ってくれない。

それはとても残酷なことだけれど、想いに応えられないと分かっているながら無駄な努力をしようとしたりしないところも彼なりの優しさだということくらい分かっている。それに腹を立てて、いつも憎まれ口ばかり叩く笙子の言葉を正面から受け止めてくれるのが彼のせめてもの想いだということも分かっている。

分かっているにしても、腹が立つ。



何時になつたらこの想いを消化出来るのか。

死ぬまでこの人と顔を合わせて生きることが義務付けられている自分に、他の男を見ることが出来る日など来るのか。

でも、出来なくても彼の側を離れたくはない。

望むような形でなくてもいい。彼の側にいたい。ほんの少しでも彼の近くに。

「……では、わたくしそろそろお部屋に戻ります」

「うん。おやすみ」

「また明日にでも参りますわ」

「明日は琴と長唄の稽古があつて忙しいんじゃないのか？ 無理しなくても……」

「平気ですわ。わたくしが来なくて、千歳様が寂しい寂しいと泣かれてはお気の毒ですもの」

強気な笑みを浮かべ、笙子は異国製の椅子から立ち上がる。

彼は、千歳は面食らつたような顔をしてからやはり笑つた。

「そうだな。笙子の憎まれ口が聞けないと寂しいな」

「そうでしょう？ ですから仕方ありませんから来て差し上げる」

「お待ち申しあげているよ」

望むような形でなくても、永遠にこの距離が縮まる事はなくとも、それでも傍にいたい。

「明日も明後日も、結婚しようと言つて子を産もうと参りますわ。貴方は人にいたぶられるのが好きなのですね」

「違つて言つてゐるのに。人に変な性癖つけるなよ」

口を尖らせる千歳に、笙子薄く笑つて部屋を後にした。

明日も明後日も、この想いが変わらなくても、貴方が寂しくないように。

貴方の子として此処へ来よう。

笙子は目に滲んだ涙を袖で拭くと、毅然と顔を上げて階上へと足を向けた。

了

## 薄夜の音（後書き）

前書きの通り、明治時代末期くらいのお話になりました。主人公の笙子は結恵のひいおじいさんの妹という設定です。結恵のおじいさんの義将さんから見ると叔母にあたる人物です。お嬢様口調のお嬢様を書いてとても楽しかったです。

そして時代的には本編でも舞台となった本家のお屋敷の落成直後でもあります。そして綾峰さんの本家は財閥家系ということで男爵家になりました。多分それくらいじゃないかなと想像しながら書いた覚えがあります。

それでは時代考証等甘い部分もありますが読んで下さりありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9019v/>

---

不可侵区域・番外短編

2011年10月10日03時20分発行